＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝転／正帝（アウグストゥス）＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第九話（A.D.357）前編＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「右！」
皇帝ユリアヌスの声で万を超える兵士が一斉に右を向いた。
「左！」
皇帝ユリアヌスの声で万を超える兵士が一斉に左を向いた。
「解散！」
皇帝ユリアヌスの声で万を超える兵士が整然と解散した。
兵士達は訓練を終えた後、秩序に沿って、持ち場に戻る——それを見て、ユリアヌスは訊ねた。
「セヴェルス、君の目から見て、彼らはどうだ？」
「強いげす」老将セヴェルスは断定した。「わしが敵なら戦う前に逃げ出すでげす。皇帝陛下の命令に全員が従っているだけでも大したものでげすが、解散した時、押し合いへし合いにならなかった。その上、皆、足元が綺麗だ」
セヴェルスの深言にユリアヌスも頷いた。彼の言う通りだ。ユリアヌスも昔は一斉行進など誰にでもできると思っていたが、実際は違う。単純な行進でも、大軍では困難だ。それを克服するには訓練が欠かせない。特に解散した後、一万を超える兵士が誰一人衝突を起こさなかった。その一点でも錬度の高さがわかる。また、足元が綺麗という事は、装備の手入れを怠っていない証である。この兵士達は錬度だけでなく規律も優れている。
「トゥルート、君の目から見て、彼らはどうだ？」
「一対一なら勝てる」トゥルートも断定した。「だが、束になられたら、手に負えない。特に伍（五人集団）を組まれたら、こっちが五人でも負ける」
トゥルートの直言にもユリアヌスは頷いた。彼女の言う通りだ。トゥルートの槍働きは凄まじい。いかにローマの精鋭といえども、個人戦では勝てない。しかし、ローマの強さは錬度と規律——そこから生まれる集団戦法である。
「アンミアヌス、この水準にある兵士の総数は？」
「はっ、総勢一万三千です」
「……ゲルマンに挑むには多いとは言えないな」
「ですが、彼らは元首制時代の正規兵に匹敵するかと思われます」
「そうか……いや、その通りだろうな」
アンミアヌスの評価は陰鬱なものを含んでいた。しかし、正鵠であろう。
全盛期のローマ正規兵とは皆このような者だったはずだ。第一、徴兵の必要すら、多くなか

った。ローマ正規兵になる事は、市民にのみ許された特権であり、高貴な義務であったからだ。男子たるものは皆、ローマ正規兵になる事に憧れ、志願者に事欠かなかった。ローマ軍はその中から、文字通りの兵（つわもの）を選りすぐればよかった。

自然、強かった。

だが、今は違う。ローマは弱い。弱い者は憧れるに足りえないから、志願も少ない。すると、貧弱な者も兵とせねばならない。結果ますます弱くなる。悪循環である。

皮肉な事だが、トゥルートなどが軍中にいる事自体、ローマが弱くなった証だ。

かつては知力や体力、視力だけでなく、体格ですら標準以下ならば、落第としていた。トゥルートがいかに異能の強者でも、少女である以上、身体検査で落第とされていたはずなのだ。それが軍中に潜り込める。これは今のローマ軍が身体検査すら、まともに行わず徴兵している事を意味する。

――いや、それどころか、嫌がる者を捕え、無理矢理兵士にしたりもしているだろう。

これで強かったら、奇跡だ。

当然そんなはずもなく、今のローマ軍は弱い。肉体で劣っている上に、士気も低い。装備や兵站、制度や戦術で補うにも限度がある。ユリアヌスの初陣が大敗に終わった第一の理由は、司令たるユリアヌス自身の無能だ。が、第二の理由としては、兵士が弱く、戦う前に逃げ出す輩も多かったからだろう。

――意欲のない者を戦場に出せば、当然か……。

しかし、この一万三千はあの二万とは違う。初陣のようにユリアヌスが震えて動けずとも、彼らは自ら、勇敢に戦い、敵兵を追い散らす。そう確信できる精鋭だ。

――ならば、『無駄飯食らい』は『足手纏い』だな。

何しろ、今度の攻撃目標はアルゲントラトゥム（現ストラスブール）である。

これは今ローマを侵食しつつあるゲルマンの根拠地だ。つまり、敵領土を延々突き進んで、中枢を撃破する事になる。やたらと兵士を増やしても、食料の減りが早くなるだけだ。

――かつてのユリウス・カエサルが滅多に軍団兵を補充しなかったのも同じ理由か？

信頼を置けない兵士を前線に出し、補給を難しくするぐらいなら、その人手は兵站の強化に回す方がいい。敵地で戦う時は特にそうだ。少なくとも、ユリアヌスはそう考えた。少数だが、精鋭の一万三千を戦闘に集中させるため、残りの兵力は後方支援に注力させるのだ。

――……それに正帝への配慮も必要だ。

馬鹿馬鹿しい話だが、ユリアヌスはそういう事も考えねばならない。ユリアヌスはあくまでも『副』帝なのだ。戦力の出し惜しみはよくないが、出し過ぎると正帝の面目を損なう。仮に正帝コンスタンティウス二世当人がわかってくれても、周囲が煽るだろう。

だから、今回のユリアヌスは裏方に相応しい戦力で行くべきだ。

ユリアヌスは長い黙考の末、結論を導く。

「よし、我々はこの一万三千で挑む。正帝陛下が派遣された【将軍（マギステル・ミリトゥム）】バルバティウス殿は三万を率いるという。合わせて、味方は四万三千。報告によれば、敵兵はおよそ三万五千。これなら勝てる」

「「御意！」」

セヴェルス、トゥルート、アンミアヌスが一斉に頷く。

「……え？　本当にいいの？」

ユリアヌスは自分で不安を口にした。この場にサルスティウスはいない。バルバティウス将軍との連携のため、東に向かっているのだ。そして、そのサルスティウスはこのように頷く事などなかった。ユリアヌスの大まかな方針は尊重しても、必ず瑕疵を指摘し、そこを修繕する進言をする。だが、この三人は賛同のみを述べた。

しかし、アンミアヌスはあえて言う。

「陛下。失礼ながら、陛下が私を甘言多き佞臣と疑っておられるのは承知の上です」

「……」

あ、バレてた？――と返す訳も行かず、ユリアヌスは黙り込んだ。

「それでなくとも、私はサルスティウス様の半分も生きておらぬ若輩。信頼できぬのも当然。しかし、それでもなお言わせてもらいます」

アンミアヌスは語気を強くした。今や、ユリアヌスの下にはサルスティウスをも上回る軍歴の主セヴェルスがいる。内政ならばともかく軍事において、サルスティウスを頼る必要はない。むしろそれはサルスティウス様への依存であり、甘えだという。

「そもサルスティウス様が陛下の軍略に一々口出ししてきたのは、ひとえに陛下がド素人であったが故。陛下があまりにアッパラパーであったが故です」

……とりあえず、ユリアヌスはアンミアヌスへの佞臣という印象を改めた。

「実戦経験は絶無。社会経験も皆無に等しい。幽閉されていた事情を加味してなお、ヘタレでオタクで引きこもり。……失礼ながら、ユリアヌス様はこんな青年に運命を委ねようとなさいますか？」

「い、いや……」

ユリアヌスは泣きたくなってきた。

しかし、アンミアヌスは大人だった。彼はユリアヌスとは同世代だが、就労経験がある男はやはり違う。落として、上げる。それをわかっていた。清々しい声で言う。

「ですが、今は違います」

「今のは熟慮の上の発言だったろ？　日頃の饒舌がなかった。無駄口が少ないのは、いい男の証だぜ」

「そして、いい指揮官でげす」

アンミアヌスに続いて、トゥルート、セヴェルスが言葉を繋げた。

これもまた甘言だ。ユリアヌスのどこか冷めた部分が告げる。

だがそれでも、ユリアヌスは別の意味で泣きたくなった。

――『幸福はその人が真の仕事をするところにある』！！

無職時代、幽閉されていた事は辛かった。殺意を向けられていた事も辛かった。しかし、今思えば、誰にも必要とされなかった事こそが苦しかった。実兄ガルスや義姉エウセビアはよくしてくれたが、それは身内への親愛である。勿論それはかけがえのないものだ。

しかし、今は社会に出て、他者に認められているのだ。

「よ、よーし。今回は合戦ではなく、会戦となる。すす、すなわち、敵戦力の撃退ではなく、殲滅を目的とする。皆励むように」

ユリアヌスは感涙に咽ぶのを誤魔化すため、必死に皇帝としての言葉を吐いた。

……もっとも、これがユリアヌスの甘さであったのだが……。

＊＊＊

「バルバティウスが来ていないっ？」

ユリアヌスは思わず叫んでしまった。

ゲルマンの根拠地アルゲントラトゥム（現ストラスブール）まであと三日。そんなところで、シャハラザードから驚きの報告を受けたのだ。

「ええと、バルバティウス将軍はメディオラヌム（現ミラノ）を出発した後、アルプスを越え、バリシア近くでライン（レヌス）川架橋に入ったのですが……」

シャハラザードによる報告内容は妥当だった。……そこまでは。

「数日待機した後、バルバティウス将軍の命令で引き返したそうです」

「はあああああ？　何でだよっ？」

「いや、何でと申されましても……」

わたしはバルバティウス将軍ではないのでわかりませんよ。シャハラザードはそんな困った顔をした。

ユリアヌスは「ああ、すまない」と謝った。シャハラザードにはその技能を活かして、偵察や間諜をやって貰っている。そして、その報告に主観を交えないのは、むしろ任務に忠実な証だろう。

情報をもとに判断するのはユリアヌスの仕事である。

「それ、何か事情はなかった？　例えば、ゲルマンが他の地点を攻撃してきたとか……」

「ええ、付近を略奪するゲルマンは多かったようです」

「なるほど、バルバティウス将軍はそれを喰いとめるべく戦い、足止めを食らった訳だ。いや、

それはむしろ誉（ほまれ）というべきだね。軍人たる者、市民の安全を第一に……」
「いえ、逆です。バルバティウス将軍は徹底した無視を貫きました」
「……それ、本当に事情があるんだよね？　だって、実際に市民は略奪されていたわけでしょ？　三万の兵を持ちながら、目の前で市民を見捨てるなんて……」
「……バルバティウス配下の兵士にも同じ意見はあったかと」
シャハラザードはそこで初めて主観を交えた。さらにバルバティウスへの敬称も捨てていた。理由はわかる。バルバティウスの態度はあの前騎兵長官マルケルスと同じだからだ。
背筋にひやりとしたものが流れる。
勿論、今のユリアヌスは一万を超える精鋭に囲まれている。しかし、敵中孤立という点ではセノネスの時と同じだ。そして、セノネスの時と違い、盾となる城壁はない。
「……他の偵察の報告を待つよ」
「はい。それがよろしいかと。わたし一人では情報収集にも自ずと偏りが出ますから」
まだ、シャハラザードの報告が間違っている可能性もある。矛盾する報告がない以上、淡い期待かもしれない。しかし、可能性は……
「サルスティウス様からの書簡です！」
その時、アンミアヌスが駆け寄ってきた。ユリアヌスはすぐに受け取る。前述の通り、サルスティウスは問題の将軍バルバティウスの所にいるからだ。
即座に開封すると、その内容は以下の通りであった。

――「バルバティウスはマルケルスと同類」

ユリアヌスは思わず呟く。
「……急いで撤退……」
「……できるのですか？」
アンミアヌスが小声で尋ねてきた。ユリアヌスは朦朧としたまま答える。
「この一万三千は精鋭だ。最悪、追撃を躱しつつの敵中突破になるけど、強行軍も不可能では……」
「背後の市民は？」
シャハラザードが冷たい声で指摘した。そんな彼女をトゥルートが何故か睨みつける。
だが、指摘は正しかった。初陣の時のドゥロコルトルムと同じだ。この精鋭一万三千の送り出すために、ガリア全土へ負担をかけているのだ。ここでユリアヌスが退けば、間違いなく、ゲルマンは蹂躙を始める。そして、ガリアの市民に抗う力は……。
「ううあああああああっっっっ！！」
ユリアヌスは頭を抱え、叫び喚いた。

「こんなのどうしろっていうんだよぉぉぉぉぉっ？！」

しかし、忠臣に恵まれていた。アンミアヌスは「人払いを。それから緘口令だ。流言飛語があれば、その場で斬れ。責任は私がとる」と周囲に指示を始める。

そして、トゥルートは勿論、シャハラザードもそれ以上何も言わない。

彼女たちも本当は不安なはずだ。それでも、黙っていてくれた。

だから、ユリアヌスは一人子供のように蹲った後、泣き声で告げる。

「……時間をくれ。明日の正午には結論を出す」

決断が遅れる毎に犠牲が増える。しかし、決断を誤れば、さらに犠牲が増える。

ユリアヌスは兵士と市民の犠牲と引き換えに、熟慮の時間を求めたのだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第九話（A.D.357）中編＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一万三千で敵中孤立――まさに最悪の事態だった。

敵する蛮族軍は三万五千、自軍の倍以上である。しかも、敵根拠地のすぐ傍、徒歩一日だ。当然、地理に詳しく、補給も容易い。援軍も呼べる。というか、まだ後方には予備兵力が五千はいるだろう。つまり、四万――自軍の三倍以上と見積もるべきかもしれない（全軍を出してこないのは、数が多過ぎて指揮が困難になる事に加え、三万五千もあれば、十分という判断に違いない）。

逆に、こちらはメディオラムヌ（現ナポリ）まで四十日かかる。補給も援軍も困難だ。一応近くにはバルバティウス軍三万がいるものの、これを友軍と見做すのはもう無理である。敵に寝返らないでいてくれる事だけを救いと考えねばならない（バルバティウスがあたかも通敵しているかのようにローマ側の船舶や糧秣を焼いているとの未確認情報もあるが、さすがにこれは虚報だろう）。

……よくも、ここまで不利な条件を積み上げられるものである。

ただ、少数精鋭であった事が幸いし、今回も軽挙妄動がなかった。

皇帝ユリアヌス当人を除いて。

そう、ユリアヌスはふらふらと陣中を歩いていた。元々、身なりが質素で威厳に欠ける。だから、皇帝の証たる紅の外套さえ外してしまえば、こんな芸当も可能なのだ。

何より、じっとしていられなかった。つまり、落ち着きのない子供と同じである。

後世、ユリアヌスは肯定派否定派双方から、胡散臭い伝説を幾つも並べられる。しかし、

『質素』『勤勉』『聡明』――そして、『軽率』は万人が口を揃えるところだった。

ユリアヌスは朦朧と歩き続け、しかし、反射的にその身を隠した。

アンミアヌスとセヴェルスの姿を目にしたからだ。

「三万五千でげす。予測通りでげすな」

どうやら、セヴェルスは改めて敵の総数を調べていたらしい。しかし、衝撃の一言を続ける。

「だけど、奇妙でげすな。女子供がほとんどいないでげす」

――あああああああ、やっぱり……！！

ユリアヌスは内心絶叫した。敵は三万五千。蛮族にしては少数だと思っていたのだ。

つまり、あちらも今回は少数精鋭なのだ。元々蛮族の女子供は、戦場における兵站と観戦と予備兵力を兼ねている（なお、蛮族に老人はほとんどいない。理由はお察しいただきたい）。

つまり、仮に敵数が三万五千でも、純戦闘員は二万程度という事もしばしばだった。だから、ローマ軍は数では勝る蛮族軍に拮抗しえたのだ。

しかし、今回は違う。ユリアヌスも薄々気づいていたように、蛮族軍もローマ軍のように、決戦兵力を揃えてきたのだ。これは状況がさらに不利になったというだけではない（いやいや、それだけでも重大問題なのだが）。すなわち――、

「やはり彼らも我々から学んでいるのだ」

とアンミアヌスはユリアヌスと同じ結論に至っていた。

「防具にも金属が増えていますな。……一昔前は蛮族なぞ、革の盾がせいぜいだったのに」

「それもゲルマンが進歩している証だろうな」

（話の筋とは外れるが、ユリアヌスは『……アンミアヌス、元々年上なセヴェルスが今や騎兵長官（マギステル＝エクイツム）で階級も上なんだ。ちゃんと敬語を使ってよ。いや、セヴェルスもセヴェルスだ。君が序列を守らせなければ、下の者に示しがつかないだろう？』と思った。だが、『とはいえ、ずっと下働きだったセヴェルスがいきなり権高になるのは難しいだろうな……。僕も似た苦労したし。時々トゥルートやサルスティウス相手に敬語になっちゃうし。私的な領域に限れば、黙認するか』とも考えた）

「時々思うよ。キリスト教徒の言う《神の意志》とは《歴史の必然》を意味するのではないか？――と」

アンミアヌスの言葉はユリアヌスにも素直に受け入れられた。

元々、ユリアヌスはマルクス・アウレリウス帝に私淑しており、かの哲人皇帝はストア派の代表格だ。当然、ユリアヌスはストア派哲学にも、その決定論的側面にも理解がある。

一方でセヴェルスは現実論だけを述べる。

「敵が知識や技術を吸収し、進歩を続ける以上、いずれ追い越されると？」

「……第二次ポエニ戦争の頃はよかったな」アンミアヌスは直接の返答を避けた。「あの時も、積極派と消極派はいた。平民（プレーブス）と貴族（パトリキ）の対立もあった。だが、ローマという同じ船に乗っている。そんな一体感があった。政争であって、党争ではなかった。共和制が機能するはずさ」

約五百年前のポエニ戦争の頃、ローマは若く、敵国カタルゴは老いていた。

当時のローマも、カタルゴの勇将ハンニバルへの対応で、積極派と消極派に分かれていた。が、その断絶はカタルゴや今のローマ程ではなかった。

例えば、反対を押し切って出撃した積極派が窮地に陥れば、消極派も身を削って救出に向かった。また、積極派の長スピキオが消極派の長ファビウスを説き伏せる時も、まずファビウス達の功績と判断の正しさを讃え、その上で状況の変化を語った。

あの頃のローマには国家としての一体感があった。同じ船に乗っているという認識の共有があった。だからこそ、立場や方法の違いがあっても、浸水があれば、その解決するため、皆が一丸となった。

老大国カタルゴ本土は真逆だった。

カタルゴは孤立奮戦するハンニバルをほとんど支援しなかった。だから、敗れた。

しかし、もはやローマも老いた。かつてのカタルゴと同じ問題を抱えている。

「それこそ、今のユリアヌス様はハンニバルとそっくりだ。孤立奮闘し、戦果を上げる程に、正帝は疑い、支援が遠のく。これでは勝てる戦も勝てぬよ」

この意見については、ユリアヌスも身を隠していなければ、

――いや、正帝は頑張っているはずだ。僕を支援する気もちゃんとある。

と反論したかった。少なくとも、バルバティウスの行動は正帝の陰謀ではないはずだ。

この戦の重みはセノネスの比ではない。あの時はユリアヌスとその直属の命運がかかっていたに過ぎない。だが、今回はガリア、ひいてはローマの命運にも繋がる一戦なのだ。で、ある以上、正帝が猜疑心の塊だったとしても、下らぬたくらみを巡らす筈がない。

――何故なら、君主制の利点は、責任の所在が明白になることだからね。

国が滅びれば、その責任は最高権力者である君主（正帝）が負わねばならない。そのため、君主は保身を賭けて、国家のために努力をする。例えば、元老院出身の皇帝には名君も多い。だが、その名君も元老院の一人であった頃はろくに仕事をしない事が多かった。最高権力者になって初めて、国家の安寧と自身の安全が直結するようになり、それ故に私心を抑え、国益を求めるようになっただけだからだ。

今の正帝も国家の最高責任者である。だから、国家のために（≒保身のために）努力をするはずだ。そして、この場合、努力とはユリアヌスを支援する事だ。

――ローマがここで負けたら、正帝自身の地位だって危ういんだ。当然さ。

だから、この国家の危機の中、ユリアヌスに支援が来ないのならば、それは正帝当人よりもその命令を実行する宦官や官僚に問題があるのだろう。

――……とはいえ、本質は変わらないかもしれないな。結局は老大国の構造問題だ……。

ユリアヌスは気が滅入った。

集団責任は無責任になる。その構造が今のローマにはある。かつてのカタルゴと同じだ。

正帝にしろ、その取り巻きである宦官も官僚にしろ、ユリアヌスが敗北し、ガリアが蹂躙されれば、困る。ならば、ユリアヌスを支援すべきなのだ。

だが、現在の宮廷政治ではこの単純な論理が通用しない。何故か？

「ローマという船は大きくなり過ぎたのかもしれん。船が小さい時には共有できた問題意識を今では共有できなくなっている」

アンミアヌスはユリアヌスの心中を代弁した。

「船が小さい頃は沈みそうか否かを乗客全員が把握できる。それ故、自ずと一致団結できる。だが、船が大きくなると、そうはいかない。実際、所々浸水していても沈没には直結しない。それどころか、浸水そのものが認識できなかったりする」

「……彼らには今にも攻めてきそうなあの蛮族の姿も見えねえわけでげすか？」

「実際、東方にはまだ余裕がある。……もっとも対ペルシャ戦線でも似た構造はあったがな」

結果、危機を伝える者は危機を煽る者とされ、変革の訴えも無能故の不平不満とされる。問題を指摘された時、問題そのものの有無ではなく、それを指摘する者を貶す風潮が高まる。

カタルゴやハンニバルと同じ命運を、ローマやユリアヌスは辿ろうとしている……。

ヒトは赤子として生まれる。育てば、大人になる。大きな体と力を手にする。が、その次に待っているのは、老いであり、死である。

国も同じだ。ローマは小さな国として生まれ、育ち、大きくなった。だが、大国は老大国になり、やがては老国となって滅びるしかない。

ユリアヌスは荒れ狂う濁流を人の手で押し止めようとしている気になってきた。

そんな事、出来るはずないのに。

＊＊＊

「どういう心算（つもり）だっ？」

二人になった瞬間、トゥルートはシャハラザードの首根っこを掴んでいた。

「あら、トゥルート姉さま、まだ昼間だというのに……はいはい、わかりましたよ」

「……本当にわかっているのか？」

『背後の市民は？』の一言でしょ？　たしかに余計だったかなーとは思いましたよ」

「わかっているなら、何であんな事を言った？！」

背後の市民を意識しなければ、ユリアヌスは即時撤退も決断できたかもしれない。それが、

このペルシャ娘の一言で迷い苦しむ羽目になったのだ。

元々、ユリアヌスには理想に走るところがある。

例えば、ローマの兵士達が戦乱の中で、略奪や強姦をしているのを見つけたとしよう。

――分を弁えていれば、黙認。度が過ぎれば、斬首。

トゥルートならそう考える。この時代の人間ならば、それが妥当な判断というものである。

だが、ユリアヌスは違った。その兵士達に、人倫を説き、道徳を説いたのだ。軍人の責務を語り、弱者や敗者を虐げるのではなく、自らの同胞とするローマの伝統を語ったのだ。

トゥルートからすれば愚かとしか言いようがない。

そも兵士の多くは略奪や強姦が目当てで戦争に行くものだ。蛮族はそれを公言、推奨すらしている。また文明人にしたところで暗黙の権利と考えている。たしかにローマでは給料が保障されている事もあって、この手の蛮行が控えめである。だからこそ、トゥルートもローマ軍を選んだ。しかし所詮は五十歩百歩だ。

ただ――それでもなお、理想を求めるのがユリアヌスなのだ。

そんなユリアヌスに市民の存在を指摘すれば、戦術判断の妨げになるに決まっている！

しかし、シャハラザードは皮肉気に語る。

「でも、ユリアヌス様は正義を重んじられます。民草の身命を第一に考えられます。そして、そのためのローマ帝国だと本気で思っていらっしゃいます」

「だから？」

「……わたしが言わずとも遅かれ早かれ、同じ苦しみに辿り着いたかと」

あの人、わたしなんかと違って、本当に頭がいいから……と、シャハラザードは何故か唇を噛んだ。

「馬鹿馬鹿しい！」

トゥルートはシャハラザードを突き飛ばした。

どう言い返せばいいのかわからなかったからでもある。所詮、トゥルートは槍使いであり、シャハラザードは語り部でもある。口舌で勝てるはずもない。

倒れたシャハラザードは、しかし、奇妙な事を言い出した。

「……羨ましいのですか？」

「はあ？」

「彼に嫉妬しているのですかと聞いているのです」

「どういう意味だよ？」

「今回だけではありません。国家の正義、軍人の義務、皇帝の責任……そういった理想を彼が口にする度に、あなたは微笑みながらも、どこか苛立っていますよね？」

トゥルートの心臓が高鳴った。

ユリアヌスが理想を求める理由はもう知っている。ユリアヌスがそれだけこの現実が嫌いだ

からだ。

だが、それをこの阿婆擦れに教えてやる必要もない。

「……綺麗事を言う奴は、大概不幸な結果を齎すからな」

「綺麗事を成し遂げる男は、不幸を齎しますか？」

「……それで、どうして、あたしが嫉妬しなきゃいけない？」

「あなたが無能だからです。綺麗事を成し遂げられないからです」

「……！」

……トゥルートはゲルマン人に家族と故郷を蹂躙された。だから、復讐を誓った。同じ悲劇を繰り返させまいと軍人になった。だが、現実にはトゥルートがいくら戦っても無駄だった。次から次へと押し寄せるゲルマン人の撃退など、不可能だった。トゥルートの力で平和を取り戻すなど、所詮は夢物語だった。

しかし、ユリアヌスは違う。彼が来てからまだ二年も経っていない。なのに、戦局は大きく変わった。文字通りの連戦連捷。たしかに今回は苦境だ。だが、逆にここさえ切り抜ければ、ローマはゲルマン人に脅えずにすむ。ド素人がわずか二年足らずでだ！　大した動機も経験もないくせに、あいつはここまでやったのだ。

立場の違いというものはある。トゥルートは一兵士だが、ユリアヌスには指揮権がある。

だが、立場が逆だったとして、トゥルートに同じ事ができるか？

認めざるを得ない。

ユリアヌスは……格が違うのだ。

「だが……それは貴様の勝手な思い込みだろう」

「……そうですね。では訂正しましょう。わたしが彼に嫉妬しています。だから、彼の破滅を心のどこかで願っています」

「……シャハラザード？」

「彼が理想のために無謀な戦いをし、結果、すべてを失うところが見たいのです。打ちひしがれた彼に言ってやりたいのです。『ほら、やっぱりこうなった。わたしは正しかった』と」

「貴様……！」

そこでシャハラザードの口調が変わった。

「国家の正義？　軍人の義務？　皇帝の責任？――そんなものを信じている奴は馬鹿なのよ。国家は国民を裏切るし、軍人が民衆を守るのはおとぎ話の中だけ。皇帝なんて、所詮は盗賊の親玉みたいなもの。その程度の『現実』もわかってない奴は、どうしようもない馬鹿だわ。……そう思っていたのに」

だが、ユリアヌスはその『現実』を否定した。口舌ではなく、揺るがぬ結果で。

「苛々するのよ。彼を見ていると。自分が無能なだけだったと思い知らされるから。……成長したんだ。大人になったんだ。そう思う事で慰めてきた自分の人生が否定されるみたいで」

バルバティウスが事実上の敵前逃亡に走ったのもそれが理由だ。
シャハラザードはそう断定した。
彼だけではない。これまでユリアヌスを消極的に裏切った者達に、皆が皆、正帝への媚態があったわけではない。マルケルスやバルバティウスはユリアヌスと同じ指揮権を持ちながら、何年も敗勢を続けていたのだ。忸怩たる思いがなかったはずがないと……。
そしてシャハラザードの双眸に狂気が宿る。
「あるいは彼のような人間こそが《救世主（メシア）》なのかも……。いえ、彼のような人間こそが《救世主（メシア）》足るべきなのかも」
「……お前、あの童貞野郎に何を期待していんだ？」
「――世界の救済を」
「正気かよ？」
「あなたは違うの？　トゥルート姉さま……いえ、ゲルトルート・ゲイルスケグル」
「……あたしが望んでいるのは、このガリアの救済だ。世界の救済まで、あのヘタレに背負わせるつもりはない」
「ヘタレだからこそよ。逆に聞くわ。眉一つ動かさずに人を殺せる男をあなたは《救世主（メシア）》と認めるの？」
「それは……」
「そういう男を御所望なら、何人でも紹介してあげるわ。でも、わたしは嫌よ。あんな連中に救済を委ねるなんて、わたしは……嫌だ」
「シャハラザード？」
「そうよ。ああいうヘタレ野郎こそ、《救世主（メシア）》に相応しい……！」

トゥルートは語り部の売女をさらに殴り飛ばした。

所詮お前はわかっていない。お前は冬山で迷っていたユリアヌスを知らない。お前は初陣で震えていたユリアヌスを知らない。
だが、あれが本当のユリアヌスなんだ。何もないところでもすっ転ぶドジっ子なんだ。
若き勇将、ガリアの守護者、知性と忍耐を兼ね備えた偉大なる皇帝――全部嘘だ。
でも、お前はそんな嘘をつき始めた頃のユリアヌスしか見ていない。
だから、無責任なことが言えるんだ。
本当のユリアヌスは弱虫で泣き虫で意気地なし。だけど頑張る。だから頑張る。
――あたしの弟みたいなやつなんだ。

＊＊＊

ユリアヌスが皇帝用の天幕に戻ると、トゥルートが寝台近くで待機していた。
何故か、むすっとしている。
「ああ、心配かけてごめん。僕はもう大丈夫。考えもまとまったから……」
「で？」トゥルートは話を遮る。「どう攻めるんだ？」
「はい？」
「奇襲か？　夜襲か？　攪乱工作か？　正面突破か？　いや、暗殺か？　まー、仕方がない。お前が言うなら、あたしは何だってやるさ」
「君は何を……」
「ほら、皇帝陛下。あたしに命令しろよ。『僕のために戦え』ってな」
「……トゥルート、君の忠誠と戦意はわかった。感謝もするし、尊敬もする。しかし、戦局は厳しい……」
「けど、戦うんだろ？」
「いや、戦わない」
苦渋の決断に、トゥルートは眉を顰める。
「……背後の市民は？」
トゥルートはシャハラザードと同じ発言をした。
「見たろ？　あの三万五千は精鋭だ。半端な都市では防げない。拮抗しうるのは、あたしらの一万三千だけだ。そのあたしらが背を向ければ、ガリアは為す術もなく踏み躙られるぞ」
さらにトゥルートは戦略や兵站に口を出す。この手の越権行為は珍しかった。
「大体、この規模の遠征は二度も三度もできるもんじゃない。突撃馬鹿のあたしですらわかる。一度やっただけで家財政とやらは火の車なんじゃないのか？　なら、この一度で蹴りをつけるべきだろ？」
ユリアヌスは眼を逸らす。
「それは理想だよ。少しは現実を見ないと……」
次の瞬間、ユリアヌスは後ろに吹き飛んでいた。
「……っ！」
トゥルートに殴られたとわかったのは、頬の痛みと血の味ゆえである。ユリアヌスは小柄だ。長年の粗食で痩せぎすでもある。しかし、それを加味してもなお演劇じみた吹き飛び方だった。トゥルートの人外じみた拳撃には驚嘆するしかない。
「はっ、現実ね？　現実。お前の口からそんな言葉が出るなんてね」
男装の少女はわざとらしく肩をすくめる。

「がっかりだよ。てっきりまた青臭い理想を並べて、あたしを苛々させてくれると思っていたのにさ。あーあ、がっかりだ」

「ト……トゥルート、何を怒っているの？　僕に悪いところがあったなら、謝るし、直すよ。だから……」

今度は蹴りが飛んできた。反射的に躱したが、しなやかな足刀は大地を抉っていた。

――ちょ、直撃したら、死ぬ……？！

しかし、トゥルートは下種（げす）な笑みを浮かべていた。

「ほら、前に言っていたろ？　徒手格闘訓練だ。つきやってやるよ」

「……い、意味がわからない」

それも二重三重にわからない。大体、ユリアヌスが理想論を説くのに対し、トゥルート達は現実論で窘める事が多かったのだ。何故、現実論を説いた今回に限り、こんな目に？

「あ、そ。じゃあ、一方的にボコるから。はい決定～」

そして、彼女は拳を振り上げる。ユリアヌスは恐怖から顔面を守る。すると、拳は腹に突き刺さる。ユリアヌスは痛みで蹲るものの、そのまま亀のように丸くなった。防御姿勢としては悪くない。だが、反撃は困難な格好だ。

トゥルートはこれ幸いと何度も蹴りつける。何度も何度も踏み躙られる。

ケラケラと笑われながら、ユリアヌスは虐げられた。

まるで、いじめられっ子だった昔のようだ。

いや昔なら、いつも兄が助けに来てくれた。でも、もう兄はいない。助けに来てくれる者は誰もいない。

頼れるのは自分だけだ。

「理想？　理想を言えって？　ああ言ってやるさ！」

ユリアヌスも吹っ切れた。状況がさっぱりだが、ここまでされて黙っているいわれはない。それでなくとも、戦場暮らしで気が荒くなっているのだ。

「大体、一万三千は軍団長（レガートゥス）が率いる規模！　本来、司令官（インペラートル）が率いる規模ではない！」

――殴り合いでは勝ち目がない。組み合いに持ち込むしかない。

そう考えて、ユリアヌスは体当たりを仕掛ける。

こんな時でも頭でっかちである。勿論、本当に頭だけで考えれば、他の衛士を呼ぶべきだ。何故なら、ユリアヌスは皇帝（インペラートル）なのだから。しかし、この時、ユリアヌスもその選択肢だけは除外していた。己の肉体のみで、トゥルートに一矢報いようとしていた。

「各軍団長が一万を率い、それを五つ束ねた五万を司令官（インペラートル）である僕が指揮する！」

ユリアヌスは体当たりから、強引に片足を取る。偶然にもそれは柔道でいう『朽木倒し（くちきたお）』に近い形となった。

「あとは包囲殲滅！　それが理想さ！」

それでもトゥルートは持ち直す。ただし、姿勢は崩れ、互いに膝立ちになる。
「理想が現実だった頃もあった。五賢帝時代がそうだ。いや……！」
ユリアヌスの右手がトゥルートの左手を握り、ユリアヌスの左手がトゥルートの右手を握る。
――取った。これなら、男女の筋力差で……！
ユリアヌスはトゥルートを一気に組み伏せる。
「バルバティウスが来ていれば、それに近い構図になった。でも、今はもう無理だ！」
「なら、あたしらが一人で五人分戦えばいい！」
「出来る訳ないだろ！」
……気が付いたら、トゥルートを寝台の上に押し倒す形になっていた。
滑らかな肌、柔らかい肉――ユリアヌスが初めて触る女の身体がそこにはあった。
「ほらみろ」
トゥルートは顔をそむける。
「お前が信用していないのは自分じゃない。他人だ。お前はお前の部下の力を信頼していないんだ」
少女の瞳に涙が浮かんでいた。
「――ねえ、ユリアヌス、あたしってそんなに頼りない？」

そして、青年と少女の影は重なった。

……後で知った事だが、トゥルートは生理後十四日目でムラムラしていたらしい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第九話（A.D.357）後編＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日――。
「今日、歩き方、変ですね？」
とシャハラザードが声をかけてきた。
「あ……ああ、ちょっと下腹が痛くてな」
「生理軽い方なのでは？」
――こいつは意外と鈍いのか？　鈍い振りをしているのか？
トゥルートは勘ぐったものの、適当に誤魔化すことにした。
「……昨日はすまなかったな」
「……あなたが偽装投降し、敵の指揮官級を暗殺という手もあったのではありませんか？」
シャハラザードは謝罪を受け入れず、逆に意地が悪い事を言ってきた。別に意外でもないが、粘着質な娘だ。

「特にあなたは見た目がゲルマンです。極端な話、『女装』して、潜入すれば……」
「あたしも昨日同じ事を言ったよ」
褥（しとね）の上で――というところはトゥルートも隠す。
「だが、こっちの方が勝算は高い――それが【大将（インペラートル）】としての『我が君』の判断だとさ」
そう、既に互いの陣形は整っていた。
ローマもゲルマンも、互いの殲滅を目的とした会戦を選択していたのだ。

＊＊＊

敵軍兵数三万五千。予備兵力は多数。陣形は凸型魚鱗。騎兵を前に出し、歩兵が後に続くという編成。明らかに中央突破を狙っている。
友軍兵数一万三千。予備兵力は皆無。陣形は凹型鶴翼。左右両翼が騎兵、中央本陣が歩兵という編成。こちらは包囲殲滅を狙っている。
文字通り、互いに噛み合う陣形だ。わかりやすい構図とも言える。
それだけに後者には『勝てる訳がない！』という不安があるはずだった。『兵数で劣る側が戦力分散してどうする？』という疑念があるはずだった。
しかし、兵士たちは黙々と配置についてくれた。
ユリアヌスは彼ら一人一人の顔を見渡す。
――今だけではない。
これまで何度もユリアヌスは危機に陥った。ユリアヌスはその度に混乱し、懊悩した。だが、この兵士たちは決して軽挙妄動は起こさず、ユリアヌスの決定を待ち、その上でユリアヌスの命令に従ってくれたのだ。
――マルケルスやバルバティウスとは違う。
兵達の潜在的な士気は低くない。考えてみれば、当然だ。トゥルートも言っていた通りだ。彼らは地元を荒らされている。そして、彼らは元々民草である。土と共に生きている。農民だ。いざとなれば、東方へ逃げればいいと考えている高級官僚とは訳が違う。
家族を守りたい。故郷を取り戻したい。
その思いは人一倍なのだ。
だからこそ、コローニア奪還の時も、セノネス籠城の時も、このアルゲントラトゥム決戦においても、彼らは苦難の中で戦うのだ。
――彼らこそ、僕の宝であり、僕の礎だ。彼らのために、彼らを束ねる。それが僕の義務だ。
「ここに我らはカンネーを摸倣し、ザマを再現する……！」
ユリアヌスは差し出した右手を握りしめる。
「取り戻すんだ――僕の、僕達の《ローマの平和（パクス・ロマーナ）》を！」

あの時、アンミアヌスは、言った。『やはり彼らも我々から学んでいるのだ』と。
しかし、ユリアヌスなら、付け加える。『我々が彼らから学んでいるように』と。
本来、ローマは農業国であり、市民兵の軍隊である。自然、騎兵は弱い。
いや、弱かった。
だが、今は違う。それこそ敵であった騎馬民族をも受け容れ、その戦法技術を咀嚼吸収しているのだ。特に、今回両翼に配置された精鋭騎兵は、帝国の規律正しさと蛮族の勇猛さを兼ね備えた最強部隊といってもいい。
そして、それを率いるセヴェルスは文句なしの実力者である。
だから、ローマ両翼が綺麗に進軍していく。絵に描いたように美しい。理想的な包囲展開だ。
逆に蛮族は単純愚直だった。三万五千で突撃してくる。故に恐ろしい。下手に小細工しないからこその強さだ。彼らは余計な事を考えない。故に戦力集中の原則へ忠実なのだ。
だから、蛮族軍には凸型魚鱗陣形しかない。
反面、帝国軍は変わらず凹型鶴翼陣形のままだ。
戦力分散の愚を、あえて犯したままだ。
しかし、それでも中央の歩兵部隊は微動だにしなかった。
分散した一万三千で、集中した三万五千の敵軍を受け止めたのだ。
天上から見下ろせば、荒れ狂う濁流を人の手で押し止めているかのようだろう。
ユリアヌスは叱咤激励し、兵士たちは奮戦敢闘し、そして、思う。
――僕達はできるかもしれない。
歴史の必然も、自然の摂理も、神の意志すらも、人の手で曲げられるかもしれない。
ユリアヌスは隠し持っていた十字架を左手で握りしめる。
「神よ。たとえ滅びが運命(さだめ)だとしても、僕らは抗うぞ……！」

＊＊＊

――追い付けない！！
トゥルートは泣きたい気分だった。

＊＊＊

当然ながら、一万三千（をさらに分散させた兵力）で、三万五千を受け止めるには無理がある。
だから、ユリアヌスは前線を駆け巡り、矢継ぎ早に指示を出し続けた。どこかの部隊に少し

でも余裕ができれば、苦戦している部隊への救援に向かうように命令を出す。あるいはその逆、苦戦する部隊に、余裕がある部隊から兵士を回す命令を出す。

元々、万を超える兵士同士が激突した場合、全員が全員、戦闘に参加し続けるわけではない。どうしても最前線に辿りつけない『遊兵』ができる。三万五千の蛮族ならば、一度に最前線で戦える兵士は、せいぜい一万程度だったりする。

では、逆に一万三千の兵士の『遊兵率』を二割に抑えられれば？

一万三千の『非遊兵率』を八割にまで引き上げれば？

蛮族の実動兵力一万を超えられる！

……とはいえ、常識的に考えれば、これも机上の空論というべきだろう。

まず兵士が狂乱の戦場で、適切な配置に動き続けねばならない。そもそも、遊兵には消耗を抑え、休息を得て、回復を行う役割がある。これをなくす事は兵士への負担を増やす事に繋がる。

それこそ、一人で五人分戦い続ける覚悟がいる。

まして……、

指揮官は常に変化し続ける戦況の中、最短最速で最適な指示を出し続けねばならない。

人間業ではない。

だが、皇帝ユリアヌスはそれを成し遂げつつあった。

しかし、その結果、指示を出すために前線を駆け巡る皇帝に、筆頭衛士のトゥルートが追い付けないという奇天烈な現象が起きていたのだ。

＊＊＊

「あいつは！　去年までは！　ただ馬に乗るだけでも！　おっかなびっくりだったんぞ！」

それが今ではテキパキと命令を放ちつつ、縦横無尽に戦場を駆け巡っている。

対するトゥルートはそんなユリアヌスを……、

「畜生っ！　とうとう見失った……」

思わず、自嘲した。皇帝ユリアヌスの影は遥か遠くに去って行く。

――「トゥルート、君を【筆頭衛士（プリムス・リクトル）】に任命します。決して僕の傍を離れぬよう」

一年前のあの命令をトゥルートは守れなかった。

――昨夜の取っ組み合い……ユリアヌスに自信を付けさせるために、あたしは手を抜いた。

だが、全力でやりあったら、あたしは勝てたのか？

トゥルートの迷いに気付いたのか、馬が自ずと足を止める。

ところが、そんなトゥルートに敵の矢も届かない。ローマ歩兵は完璧に機能し、敵の攻撃を遮断していたからだ。

さすがに兵士には『戦場で棒立ち？』『こいつ、何やっているんだ？』と胡乱な目を向けてくる者もいた。だが、すぐさま『ん、皇帝陛下直属の衛士か？』『なら、特命か何かがあるのだろう』『俺は俺は義務を果たすのみ』という顔になって、前線へ向かう。

実際、トゥルートはただ棒立ちしているだけだったのに……。

それは組織への盲従ではない。システムへの信頼だ。

荒廃した世界しか知らないトゥルートには想像もつかない感覚だった。戦場で背中を任せ合える相棒というのはわかる。しかし、そこにあったのは、顔を見た事がない相手であっても、同じ社会の構成する仲間であれば、まずは協調すべきという行動原理であった。

――これがローマの力、文明の力、ユリアヌスの力……。

今なら、わかる。ゲルマンもトゥルートも野蛮人だ。野蛮人は勇猛ではある。個々の武では文明人に勝る。今回のように蛮族が精鋭ならば、尚の事。しかし、伍を組んだ兵士には劣る。そしてそれは万を超えた兵士同士でも同じなのだ。

今なら、わかる。ゲルマンの足並みは揃っていない。強者は敵を倒して前に進むが、弱者はそこへ追い付けない。足並みが乱れる。攻撃にアラができる。防御にムラが出来る。これではせっかく精強な戦士であっても、その遊兵率が高まり、実動率が低くなる。

ユリアヌスの下で、精密機械のように動き続けるローマ軍団に勝てるはずもない。

「ちょっと待ってよ。やっと知り合いに会えたんだから」

シャハラザードがそう言って駆け寄ってきた。

こいつ、戦闘中は何やっている？――と思ったが、それはトゥルートも同じである。結局、歯車になれない娘二人が出会ったということだ。

そして、その余裕がローマ陣営にはあった。既にローマは騎兵による両翼が包囲を閉じつつある。なのに、蛮族軍は中央歩兵すら突破できないのだ。

「ふん、これが教科書通りとやらなんだろ？　……ローマの勝ちだ」

「教科書通りですって？　あなたって、本当に馬鹿ね！」

シャハラザードは日頃の淑美をかなぐり捨てていた。ペルシャもローマと同じ文明の産物である。その語り部であるシャハラザードは当然博識である。ところが、そんなシャハラザードから見てもこの戦捷は異様らしい。

『『包囲すれば、殲滅できる』って、兵法書とやらに書いてあるんだろう。そして、その通りローマは勝つ。文句なし。頭でっかちのユリアヌスらしい勝ち方だ」

「……あなたは彼の価値を理解していないわ。ああっ、こんなことなら、何が何でも抱かれておくべきだった」

トゥルートは『抱かれる』という言葉に頬が染まるのを自覚した。だが、シャハラザードはそれを見逃す。それ程、シャハラザードは興奮していた。

「いい事？　今、ローマは少数で多数を包囲殲滅しているのよ。教科書にはこう書いてあるわ

――『ありえない。絶対失敗する』

「はぁ？　でも、神君ユリウス・カエサルはこのガリアで何度も『少数で多数を倒す』を成し遂げているんだろ？」

「あれは政治的事情から、カエサルが敵数を誇張して報告している場合がほとんどよ。無論、確かに『少数で多数を倒す』事に成功したと思われる例も幾つかあるわ。でも、そういう時、カエサルは包囲殲滅なんて狙っていない」

電撃的に敵の弱点を攻める事で、敵が数の優位を発揮させる前に、指揮系統を崩壊させ、敵全体を『敗走』に追い込んでいるだけだ。

これも容易くはない。カエサルの伝説的な指揮能力と天才的な戦術戦略の結果である。

だが、あくまでも『敗走』させているだけだ。『殲滅』しているわけではない。極言すれば、個人規模による暗殺を部隊規模でやっているだけだ。ユリアヌスもコローニア奪還の時に同じ事をやっている。無茶ではあるが、無理ではない。

「五賢帝時代だって、この手の包囲殲滅を狙う時は敵よりも多くの――それこそ、当時絶頂を極めていたローマの兵員輸送能力を全力稼働させ、敵に倍する兵数を用意したわ」

「……そりゃ、頭数は多い方がいいだろうけど……。そんな事をしてたら、今度は補給が追いつかなくなる危険があるだろ？」

「そうよ。でもね、包囲殲滅を狙う時っていうのは、その危険を冒してでも、兵数を確保する必要があるの」

「何で？」

「包囲が完成すれば、勝てる。でも、包囲が完成するまでの間、戦力を分散させる事になる。そこを各個撃破される虞（おそれ）があるもの」

「？？？」

「あー、あなたってば、『一、二、三、たくさん』の人だったわね。わたしが悪かったわ」

いや、さすがにそこまで――とトゥルートは言い返そうとした。しかし、シャハラザードは聞く耳持たずに説明を始める（こんなところはユリアヌスと五十歩百歩だ）。

「まず、味方が三人、敵方が二人の戦いを頭に浮かべて。で、敵味方共に一人当たりの強さは同じだと仮定。この時、味方三人が包囲に成功し、正面、右側面、左側面から、敵二人に一斉攻撃をかけたとする。すると味方は大勝利。これならわかるわね？」

「ああ」

「でも、味方が包囲網を完成させる前に、敵が正面の一人に二人がかりで集中攻撃を仕掛けてきたら？　この場合、左右に展開した味方の援軍は間に合わないとしたら？」

「……味方は一人で敵が二人、やられてしまうな」

「その後、左右に分かれて一人孤立している味方に、同じ要領で二人がかりの集中攻撃をしかけたら？」

「今度も味方は一人で敵が二人、またやられてしまうな」そこでトゥルートは気付く。「待てよ。これだと、順番はどうあれ、包囲しようとした側は必ず負けないか？」

「そう。包囲というのはそれが完成するまでは戦力の分散に他ならず、各個撃破の餌食になり易い。勿論、包囲が完成すれば、状況は逆転するけど、そこまでは常に博打なの」

……ユリアヌスがこの作戦を躊躇った理由がトゥルートにもようやくわかってきた。

「しかもこれは味方が三で、敵が二と、数では上回っていての話よ。それでも、包囲する側は危うい。だから、五賢帝時代でも必ず多めの兵力を用意して挑んだ。戦力を分散している時に集中攻撃されても、耐えられるように」

シャハラザードは興奮して言葉を重ねる。

「さっき彼は『カンネーを摸倣し、ザマを再現する』と叫んだけどね。とんでもない謙遜だわ。この戦術を考案したハンニバル・バルカやそれを普遍化したスピキオ・アフリカヌスも、最低でも敵と同数近い兵数が用意できなければ、こんな危うい賭けには挑まなかった。失敗するとわかっていたんでしょうね。だからこそ、ハンニバルもスピキオも名将と呼ばれている」

「……じゃあ、成功したユリアヌスは何なんだよ？」

「ハンニバルやスピキオ以上の軍神よ。……戦闘に話を限れば、既にカエサルどころか、あのアレクサンドロスの領域にある。わたしの知る限り、少数で多数を、それも倍以上を包囲殲滅なんていう例は古今東西皆無よ。皇帝ユリアヌス陛下は人類史上初の偉業を成し遂げたの……！」

シャハラザードの比喩は正直よくわからなかった。具体例をあげられても、知識がなければ、意味不明だ。また、教養人らしく、形而上学に偏る傾向がある。

ただ、シャハラザード頬は紅潮していた。それは彼女にとっても、ユリアヌスが真に特別となった証だろう。

その時、ローマ軍団から、歓声が上がった。

前を見れば、敵軍が退いていく。こうなると蛮族は脆い。

ただ老兵が一人、戦陣の前で、重槍を構え、残っていた。

シャハラザードが嘲笑う。

「あははっ、あんな老兵を殿（しんがり）なんて……本当にもう蛮族はおしまいなのね」

「違う……あの重槍はクノドマルだ」

「え、クノドマルって、たしか……」

「アラマンニ部族の長、ゲルマン民族の総司令官だよ」

ローマで言えば、【皇帝（インペラートル）】の地位にある老将だ。

そんな男が同胞を守るため、自ら盾となっているのだ。

「え、ちょっと待って？　何であなたそんな奴を知っているの？」
トゥルートは返答もせず、単騎で駆けた。
「姉としては、ここで一つ、弟にいいところを見せとかないとな！！」
祖名でもある【槍戦(ゲイルスケグル)】の間合いに入り込んだトゥルートはよく通る高い――本来の女の声――で叫ぶ。
「アラマンニの長(おさ)クノドマルよっ！」
ゲルマン語を使った甲斐があった。あるいは金髪の容姿と単騎が幸いしたか……。
いずれにせよ、敵陣に動揺が走り、矢が止まる。
「我はゲイルスケグルの末娘、ゲルトルート！　主神オーディンの御名において、一騎討ち(アインツェルカンプ)を申し込むっ！　貴君が我が父母と弟妹の仇であるが故に……！」
「【槍乙女(ゲルトルート)】だと？　何故、そのような娘子がローマ軍に？」
「我が真名(まな)を明かした故、お察し頂きたい。死せる戦士(エインヘリャル)よ」
老将は自ら殿(しんがり)を務めていた。憎悪すべき敵手であるが、尊敬すべき勇者でもあった。
だからこそ、勝敗の行方を仄めしたのだ。
彼の方でも理解したらしい。しばらく、俯いた後、高らかに宣言する。
「いいだろう。アラマンニの長クノドマル……その決闘を受けよう。死神たる戦乙女(ヴァルキュリヤ)よ……！」
実を言えば、愛槍は細い【擲槍(ゲル)】だった。その名の通り、本来は投げる槍であり、撃ち合う槍ではない。しかし、少女の細腕である事と、技が産み出す【力強さ(トゥルト)】に賭けて、初潮が来る前から使い続けていた。
しかし、これでクノドマルの重槍と撃ち合う訳にはいかない。
クノドマルは八つ裂きにしても足りぬ仇である。故にこそ、彼の武勇は熟知している。その重槍はかつての僭称皇帝マグネンティウスの実弟を打ち破った。その上でなお、率先垂範する事で、割拠志向の強いゲルマンという野蛮を纏め上げた。折紙付の強者である。
こんなか細い擲槍(ゲル)など、一合で弾き飛ばされるに違いない。
その時、風が吹く。
金色の髪が解ける。棚引く様が女の形を成す。
復讐を誓い、男装を纏って以来、決して解けなかった髪が解けたのだ。摩訶不思議である。
しかし、理由などどうでもよかった。
心臓が高鳴る。動悸が早まる。後から考えれば、それは二拍三拍の事に過ぎなかったはずだ。
だが、その数拍が永遠に思えるほどに間延びする。

だから、見えるのだ。クノマドルが振り下ろす重槍の切っ先ですら、はっきりと。

感覚の拡張、認識の最適――ユリアヌス達が【魂の脱離(エクスタシス)】と呼ぶ恍惚が心身をしろしめす。

それこそプラトンは『パイドン』で、ソクラテスに「何かを純粋に見ようとするなら、肉体から離れて、魂そのものによって、ものそのものを見なければならない」と語らせたという。

だから、見えるのだ。見えるはずない敵手の筋肉の躍動一つまで。その意図する先までも。

その先読みは反応というよりも【超反応】――未来予知と呼べる領域に到達する。

右手の槍を生贄に、左手の指先を鋭く揃える。

クノマドルは重槍にて、トゥルートの擲槍を弾き飛ばす。

老将は笑う。クノマドルにすれば、理想的な展開だったのだろう。少女の武装を打ち払ったのだから。

だが、少女の右手は囮だった。少女の左手は長く伸びる。

細腕が繰り出す、しかし、最適最速の貫手(ぬきて)である。

左手は手刀となって、真の槍を成す。

老将の首を貫く！

そして、脊髄及び神経気道血管を纏めて握る。文字通り、相手の命を握り締めている。そう、ほんの少し指先に力を込めれば、憎むべき仇の命は握り潰せる。

「……なるほど、ゲルトルート――あの時の娘か……」

クノマドルはそう言った。

「……殺せ」

生死を敵に委ねた上でこの発言だ。蛮族の長たる豪胆さを如実に示している。同時にそれは今の今まで弟と妹の事を忘れていた事に他ならない。おそらくは、似たような事を数え切れぬほど繰り返してきたのだろう。しかし、

「断る」

「……嬲って殺さねば、気が済まぬか？」

「違う。いや、無論嬲りたくはある」そこでトゥルートはラテン語に切り替えた。「しかし、今のあたしはゲイルスケグルの末娘ゲルトルートではない。ローマ皇帝ユリアヌス陛下の筆頭衛士トゥルートだ」

そして、トゥルートはユリアヌスが殺生を好まぬ事は知っている。

野蛮と、その象徴たるクノマドルやゲルトルートを嫌う事を知っているのだ。

こうして――。

アルゲントラトゥム会戦はローマの勝利に終わった。

ローマ側の死者は大隊長四名、兵士二百四十三名。

ゲルマン側の死者は約六千。だが、これは戦場で確認できたものだけだ。敗走の中、ライン（レヌス）川で溺れ死んだ者も多いと思われるが、これは確認のしようがなかった。

いずれにせよ、ローマ側一万三千、ゲルマン側三万五千以上で始まった事を考えれば、完勝といってもいい。

その上、敵将クノドマルをも捕縛したのである。